

# 高校生の進路選択に関する教育臨床学的研究

——A商業高校での支援活動の取り組みを通じて——

酒井 朗<sup>1</sup> 千葉勝吾<sup>2</sup> 濱野玲奈<sup>3</sup> 広崎純子<sup>4</sup>

## 1 研究の目的

1990年代後半以降、高卒無業者の増加問題を反映して、高校生の進路選択問題が再び注目を集めている。先行研究は、どのような高校生がいかなるプロセスで無業者という進路を選択していくのか、また家計や社会階層要因は、彼らの進路選択にどのような影響を及ぼしているのかといったテーマについて、豊富なデータを収集し分析を行ってきた。しかし、そこから得られた様々な知見は、「学校現場は、今後、高校生に対する進路指導をどう改善していけばいいのか」といった実践的課題に対する具体的方策を明確には提示していない。また、一方で苅谷他（2003）は、「従来の研究のなかでは、進路活動に乗ろうとしない高校生の意識がどのように構成されているのか、生徒たちの生活とどのように関係しあっているのかといった問題は十分解明されることはな（34頁）」かったと、分析面での課題を指摘している。

そこで我々は、卒業後無業者になる可能性の高いと思われる生徒に対し、どのような支援が可能か、つまり「問題の生じている現場に対して研究者はどういう還元をなしうるか」という臨床的な視点に立ち、首都圏にあるA商業高校において、高校生の進路選択を支援する活動を企画した。また、その活動を通じて、無業者に陥りそうな生徒たちの進路選択意識をつぶさに見ていくという分析課題も立てた。いわば、広い意味での高校生の進路選択に関するアクションリサーチを企画したのである。

この活動は同校の教師が設定した活動において、大学生や院生がボランティアとして生徒と関わりながら、おもに大学進学にむけて生徒の動機付けを高め、その実現を支援していくというもので、ボランティア活動としては2000年度から開始された。2002年度からは、より研究的な取り組みとして位置づけを変え、同年度は9月から翌3月までの7ヶ月間実施された。本

報告では、プロジェクトの意義を検討することで、今日の高校生に対する進路支援のポイントについて理解するとともに、長期にわたる活動を通じて見えてきた高校生の進路選択過程の特徴を分析する。

課題遂行のために、我々は毎回の活動に関するフィールドノートの作成や、ボランティアと生徒のメールやボランティア間の活動報告メールを収集・記録し、かつ、活動に参加した生徒に対する事前と事後のインタビューを実施した。

本稿では、この活動に関わった5名の生徒の事例を詳細に紹介することを通じて、以下の3つの問いについて検討する。

### (i) 進路指導のあり方を再考する上での、本プロジェクトの実践上の意義は何か。

今日、進路指導の現場では、「希望・自己選択重視の進路指導」や「非進路強制的指導」という2つの指導理論により、自己選択が至上価値を持つものとみなされている（耳塚，2000）との指摘を踏まえ、そこからの脱却として、本プロジェクトを構想した。したがってここでは、いわゆる「在り方生き方指導」という、生徒自身の自己選択に委ねようとする進路指導の考え方に懐疑的な立場をとる。学校は各生徒に対し、その生徒に適すると思われる進路を提示し、それに向けた努力を促すことが進路指導の重要課題ではないだろうか。ここでは、大学進学をするだけの潜在的な学力や資質があると思われる生徒たちに、大学進学にむけて努力するという価値を提示することに積極的に取り組んだ。

ただし、それは「社会からの役割期待」を提示して強い枠付けの指導を展開しようとする、旧来型の指導を意味するわけではない。一部には、これまでの「現実的な選択肢から進路を選択させる指導」を懐かしむ声もあるが、それは現在の生徒の置かれた時代的なコンテクストを軽視している。進路指導の今日的課題とは、そうした時代の流れと上述の進路指導の観点をど

う折りあわせるかという点にある。

その際に留意すべきは、現代日本がギデンズ(1993)のいう「再帰的近代」の状況にあり、何になりたいのか、どう生きたいのかを決める自由への人々の希求が日増しに強まっていることを前提とすべきだということである。その結果、本プロジェクトでは、大学進学という価値を提示しつつも、生徒自身のペースを大事にすることに重きを置き、できるだけ活動や関係への包絡(involvement)により、彼ら自身の態度変容を目指すという支援の基本方針を設定した。

以下では、こうした検討を経てなされた支援活動を通じて、現代高校生にどのような働きかけが求められているのかについて検討する。

## (ii) プロジェクトを通じて見えてきた、生徒の進路意識の特徴は何か。

進路選択とは、長期にわたってなされるものであるものの、先行研究ではその選択を「過程」として理解するには至っていない。我々は、実際に生徒の進路選択に係わることにより、その過程をつぶさに見る機会を得た。ここでは活動を通じて収集した豊富なデータに基づいてこの点を解明する。

## (iii) 生徒の進路選択には、いかなる要因がどのような形で影響しているのか。

先行研究では、親の経済状態などの要因や青年文化の影響が指摘されてきた。また、イギリスの未熟練労働者の子弟の進路選択問題を扱ったウィリス(1985)は、階級文化に裏打ちされた反抗的な生徒文化に着目している。これらの要因のそれぞれがどのように彼らの進路を規定しているのか。また併せてこれら以外に重要だと考えられる要因についても検討する。

## 2 分析の視点

生徒の進路選択過程の解明と、そこへの実践的な介入の意義を検討する上で、分析にあたり以下の諸点に留意した。

第1は、社会構成主義的な進路指導を提唱するL. Cochran(1997)が指摘するように、人々は行為や経験をストーリーとして構成しながら意味づけていくという点である。このため我々は、生徒がボランティアの学生・院生との会話の中で、どのような進路の語りを紡ぐのか、そこには誰をどのように登場させるのかといった点に着目した。

第2は、高校生とは人間形成の途上にある可塑的な存在であるという点である。生徒を対象としたアンケート調査は、その時点で、しかも用意された選択肢の枠組みでみた場合の彼らの意識の断面である。しかし、人間は常に他者と相互作用する中で自己を確認しつつ、他者に対して自己を提示していく。生徒は相互作用過程を通じて、ボランティアや教師に対して進路の語りを紡ぐのであり、その語りはその生徒の置かれた状況や相手により変化することが十分予想される。学校教育とは、この相互作用を教育的に編制して、より望ましい進路の語りを紡がせるように働きかける営為だと言え、我々はこの点に力点をおいて支援を試みた。

第3は、よりマクロな視点であり、生徒にある形で進路について語らせる社会的な権力作用への視点である。ドイツの社会学者ベック(1998)は、「個人化」という概念を用い、階級や地域社会や家父長的なジェンダー関係が提供していた伝統的なアイデンティティが崩れた現代社会においては、進路が個人の自由選択に委ねられるとともに、ある進路を選択した場合に伴う社会的な不平等や失業の危険などの問題も個人的問題として捉えられるようになったと指摘している。我々は、生徒とボランティアとのミクロな相互作用過程に注目する一方で、それを取りまく、このような時代的なコンテクストにも目を配るように留意した。

## 3 プロジェクトの概要

### (1) A商業高校における進路状況と課題

A商業高校(以下A商)は首都圏都市部に所在する公立校で在籍生徒数は約400名で、男女比は2:8である。2003年3月卒業生は卒業時までの退学率が25%で、進路先は就職25%、進学35%、未定40%であった。このようにA商では卒業生に占める進路未定者の割合が高い状況が続いているが、このことについて学校は問題視して解決すべき課題としつつも有効な方策を見いだすことができないでいた。その理由は荻谷ほか(2003)が指摘したように、進路指導の早期化と統合化が逆に進路指導に乗れない生徒を生み出したという構造的な問題にほかならない。つまり、「欠席が多くて成績が悪いと、よい進路がないから今から頑張れ」という指導は、様々な理由から成績が悪くて欠席が多い生徒にとっては、早い段階からろくな進路はないと指導されていることとなるのである。

関東某県の伝統校として有名なある商業高校の「進

路の手引き」の冒頭には、「進路の選択は自由であるが、実際の進路は不自由である」と書かれている。現在の高校における進路指導の過程はかたちとしては、適性理解→適性把握→自己決定の過程を踏んで進路選択を行わせている。しかし進路多様校などにおいては、その過程で多くの生徒が、社会や家庭の状況、自己の能力という現実と直面して「クーリングアウト」しているのである。

2000年にこのプロジェクトをはじめた時点におけるA商業高校の状況は学校全体の雰囲気は「クーリングアウト」を促すような状態であった。このプロジェクトのコーディネーター役のB教諭は、「当時、本校には『うちの生徒には大学進学なんてありえない』という認識が教員間に共有されていた」と述べている。そして、生徒が進学相談にいても、「進学担当の先生から『挨拶からできないんだから大学なんてむりよ』といわれて生徒はやる気を失っていった。」といった対応が現実になされ、大学進学に向けて具体的な指導は実質的にはなかったのである。その一方で面接・書類審査で入学できる専門学校については生徒に対して進学を薦めており、入試は無理といった前提を共有していた。

つまり、A商業高校の進路指導は生徒の低い学習意欲、高い欠席・遅刻率といった状況に対して、卒業だけが目標でフリーターになるのしかたがないということに暗黙のうちに合意していた。実際、A商業高校の生徒の中には学校に対する帰属意識が低く、最も小さな努力で卒業できればいいという意識が強く、成績について「1じゃないよね」ということだけを気にして、評定2ならば満足してそれ以上の努力は無駄であるという認識をしている生徒も少なくなかった。

このような生徒の状況があるならば生徒のモチベーションを高めるような進路指導がなされるべきであるが、実際には問題をかかえる生徒に対する生活指導が最優先され、いかに授業を成り立たせるかというところに重点がおかれ、校則中心の全体指導が実施されることとなる。その結果、多くの生徒にとっては規則で縛りつけられているという印象をもち、進路指導にも不信感や不満を持つようになる。さらに進路指導もまた提出期限や推薦願いを出すための頭髪の条件といった規則を設けることとなり、生徒の進路選択の意欲を削ぐ後ろ向きの指導がおこなわれる結果となった。

このような状況を変えるには、学校のスケジュールで進路選択を行うのではなく生徒自身のペースで進路選択を行うことが必要なのであった。教員の置かれている状況を考えると、そのためには外部の大学生がも

つ若い感性とバイタリティーの支援が必要であった。

## (2) プロジェクトのねらいと運営方法

本プロジェクトは毎週2、3日放課後に大学生、大学院生に高校にきてもらい、進路選択の相談や学習支援、試験対策支援を希望する生徒に対して行ってもらうというもので、以下の項目をねらいとしたものである。

i 大学生の実態を肌身で感じる。

A商の生徒たちはアルバイト先などで大学生との交流はあるものの、大学本来の意味や価値に触れる機会は少ない。本プロジェクトを通して大学生と自分の共通することと相違点について実感できる。

ii 進路にむけての時間を共有する。

学習や進路について努力していない生徒にとっては、すべてを放棄しても失うものがない。しかし進路に向けて勉強したり話し合ったりする時間を投資することにより失うものが生徒にできる。教師にはこの投資につきあう余裕がない。

iii 自宅学習にチャレンジすることを支援する。

この学校の生徒には学習習慣がない。学生ボランティアは教師のように強制や指示するのではなく、いっしょに学習したり自宅での勉強を促し、サポートしてくれる存在として機能しうる。

iv 入試情報の検索と願書・提出資料の書き方や内容づくりを支援する。

入試が多様化して複雑になった受験の方法や願書の書き方、AO入試などの資料づくりについて家族などに聞けない生徒の支援を行う。

## (3) 参加生徒の状況

このプロジェクトの特徴と本研究における重要な関心は、プロジェクトへの生徒の参入過程とコミットのしかたにある。

プロジェクトの参加はオープンであり、授業、プリント、掲示を通じて誰でも大学生・大学院生に相談できることがアナウンスされていたが、実際には、教員に個別相談をしたところ大学進学を勧められた生徒と、教員の側から大学進学を進路先として提示された生徒が参加している。したがって本研究でフィールドワークの対象となった生徒は全員がプロジェクトに参加し始めたきっかけを「教員に勧められて」と述べている。

具体的には、2002年9月から10月にかけて、複数の教師から進学志望者の約1/3にあたる10名ほどの3

年生がこのプロジェクトに参加して進学をめざしてはどうかと勧められた。そのうち本報告でケースとして紹介する5名は活動に9回以上参加した者である。ほかに2名が2回参加して短大に進学し、1名は数回参加したが大学進学からメイクの各種学校に進路を変更した。残りの生徒はまったく参加しなかった。

つまり、生徒たちは情報を均等に提供し参加の機会を設けアナウンスしても参入することはなく、教員に具体的に大学進学という目標を示され、背中を押されてはじめて参加するのである。本報告で取り上げる5名のケースは教員にはじめは強く促されて参加し、その後も継続的に指導を受け進路を選択していった生徒である。それぞれのケースともその進路選択過程において家庭の状況や教師や友人からの様々な働きかけといった条件や状況を、大学生・大学院生と教員が連携しながら大学進学という価値を前面に押し出しながら、生徒とともに考えたり示唆を与えたりして、場合によっては直接的な支援を行うというものであった。

#### 4 ケースの報告と分析

2003年3月に卒業した女子5名のケースについて、最大7ヶ月間の観察結果を報告する。表1には報告する5ケースの概要を示すが、氏名はいずれも仮名である。また、表2には各ケースの生徒がプロジェクトに参加した月日を示す。表中の○は通常の参加で△は挨拶程度の参加を示す。

また、ボランティアの大学生・大学院生は約10名で、1回平均2名が来校し、少ない者で2、3回、多い者で約20回の活動をおこなった。

#### (ケース1) ヒロミ

祖父母と姉と弟の5人暮らし。母は離婚して一緒に住んでいない。父親は入院中で本人とは没交渉の状態である。進路は「中学に入って落ちこぼれたあたりから、もう商業高校に入って就職しようって決め」、高校に入ってから就職か専門学校にするつもりだったという。授業については「取り組もうとするんだけど、周りがうるさすぎて。もうすっごいうるさいんですよ。もう学級崩壊なみ。自分の周りにうるさい集団がまとまって。とりあえず、でも、ちゃんとやってるつもり。」と話している。評定値は4.4で、クラス順位は1、2番である。家庭の経済状況が苦しく、高校の学費と家に入れる生活費を稼ぐために土日は夜中の12時までバイトをしている。本人いわく、本活動には「(B教諭に) 半ば無理やり」参加させられた。祖母は大学進学について一応賛意を表しているが、「(おばあちゃんは、大学に) 行けるんだったら行きなさいよとか言って、お金はなんとかかするとからとか言ってるけど、今(高校の) 学費を自分に出させてる時点で間違ってるって思う。なんとかしてないじゃん!」という本人の言葉にも表れているように、家計状況が大学進学を躊躇させる最も大きな要因となっている。

本ケースの生徒には、一方で大学受験を忌避する発言を繰り返しながら、他方、行動面では大学受験を目指して努力するという、大学進学に関する言動と行動の不一致がみられた。本活動への参加率は参加生徒のなかで最も高く、放課後用事があって一度帰宅した後にはわざわざ学校へ戻ってきて本活動に参加したり、宿題にした文献はどんなに難しいと感じても必ず読んできたりと、行動面では積極的なコミットメントを示しながら、活動に参加しているのは「B(教諭の説得)に負けて」「しょうがないから」「(参加を断れないと) あきらめた(から)」であって、「(自分としては本当は) 大学なんて行きたくない」のだと言い続けている。無論、言動にもその時々で揺らぎが見られ、「法政大学でカッコいい名前のところ(学科)をみつけた」と嬉し

表1 ケースの概要

	氏名	欠席	成績	参加以前の志望	参加後の志望	最終的な進路
1	ヒロミ	数日	A段階	就職	大学	大学(2部)
2	リエ	10日	C段階	就職	大学	大学(2部)
3	チハル	80日	C段階	フリーター	看護学校	看護助手
4	アスカ	40日	C段階	就職	大学	短大
5	ミキ	40日	D段階	フリーター	大学	フリーター

表2 活動参加状況

月	9	9	9	9	9	9	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10
日	5	18	19	25	26	27	28	2	3	7	9	10	11	16	17	18
ヒロミ		○		○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○
リエ	○			○		○	○	○	○		○		○	○	○	○
チハル	○		○	○	○							○	○			
アスカ	○	○							○			○				
ミキ	○	○		○				○					○	○		○

月	10	10	10	10	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11
日	23	24	25	26	30	6	7	8	13	14	15	20	21	27	28	29
ヒロミ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○
リエ	○		○	○	○	○		○	○	○	○		○	○		○
チハル	○									○			○		○	
アスカ	○				○	○	○	○					△			
ミキ			○	○				○	△		△	△			△	

月	12	12	12	1	2	回数
日	4	6	12	15	5	
ヒロミ	○	○				27
リエ	○	○				25
チハル		○	○	○	○	14
アスカ						9
ミキ						10

註)「○」は通常の参加、「△」は挨拶程度の参加を示す。

そうに話して、大学について熱心にボランティアの学生に話を聞いたと思えば(9/18)、「(大学になんて)行きたくない、興味もないから、志望動機なんてない(9/25)」と言ったり、積極的に小論文に取り組みながらも、志望校選びになると元気がなく、「大学には行きたくない、それは最初に来たときと変わらない」と言ったり(10/16)している。ある時は、参加を予定していた早稲田大学のオープンキャンパスがアルバイトと重なっているために行く気をなくし、ボランティアが「将来とバイトとどっちが大切なー」というと「バイト。お金」と断言する。それでも勤めると「もしかしたら『日曜はバイトできない』ってバイトの人に言ったかも」と言い、結果的にはオープンキャンパスに参加している。

ここで注意が必要なのは、生徒本人が、常に大学進学への意思と日常的な経済的負担および進学に伴う経済的不安、そしてそれに関連した家族との葛藤のなかで揺れ続けているという事情である。学業でのパフォーマンスも高く、大学進学の希望がありながら(進路決定後の親インタビューにおいて、生徒が母親に話していたことが分かった)、家計の状況を考えたり、よ

り直接的には姉から「(進学しないで)働いたら」と言われたりするなかで、「本人の意思」自体が揺れ続けている。また支援する立場にあるボランティアとしては「大学なんて行きたくない」という本人の言葉を「本人の意思」とみなすべきなのかどうかについて確信がもてず(活動時には本人が母親に「本当は行きたい」と話していたことは分からなかったため)、B教諭やスーパーバイザー(酒井)を交えた話し合いを何度も行った。その結果、「もし本当に行きたくないのであれば指導にも来ないのではないかな。現に勧められても専門学校など他の道を選んで指導に来ない生徒もいる。指導に来ているということは行きたいということなのではないか」と考え、我々に参加への強制力がない状態で本人が活動に参加しつづける限りは、「行きたくない」という発言があっても、大学進学を勧める働きかけを継続することとした。具体的な働きかけとしては、「大学は嫌」「教育学部は嫌」など頭から全面否定するような言動に対しては、一言で「大学」「○○学部」といってもいろいろあることを話すようにした。

例えば次のような会話ががあった。「(教育学部の) どういうところが嫌なの?」「B(教諭)に近づきたくな

い」「B先生は関係ないじゃない」「(教育学部の中なら)いちばん教育から遠いところがいい」「社会教育とか社会科専修とかはどう? 高齢化社会における教育とか、社会人の勉強とか…」「だんだんBに近づいてる。嫌だし、まったく興味がない」「教育学部に行ったからって、皆が先生になるわけじゃないんだよ」「そうなの?」「教育学部を卒業して、先生以外の職業に就いてる人はたくさんいるよ」「ふうん。…じゃあ、そこにしようかな」。また、本ケースの生徒は「将来は公務員か、忙しくないOLか、水商売で働きたい」と話していた。水商売に対する安易な考え方に対して「水商売はお給料いいかもしれないけど、危ない目に遭うことだってあるんだから絶対だめ!」と話すこともあった。小論文を書くのを励ますときに「ヒロミちゃんだったら書けるよ。」と言うことがあったのだが、小論文の勉強に行き詰ったときに話を聞くと「『ヒロミちゃんならできる』って言われるのがプレッシャーになる」と言われたので、以後は言わないようにしたという。

10月以降は受験勉強のためにアルバイトを辞め、「親にバイトやめたこと言っていない、どうしよう」「受験終わればまたバイトできるのに」などと言っていたが、進路決定時まで受験勉強に専念している。「(最初の受験校に)落ちたら方向を変えて就職する」とも言っていたが、最終的には二度の不合格を乗り越えて東洋大学二部に進学が決定している。「大学なんて行きたくない」という発言を「生徒の意思」と捉え、「自己選択の尊重」「自己決定」の原則に則って「じゃあ、無理矢理進学を勧めるのもなんだから、もう来なくてもいいよ」と我々が言えば、進学へのコミットメントが継続したかどうかは疑問である。またボランティアとの良好な関係や進学意欲を高める働きかけが、本活動ひいては進学へのコミットメントを強化したことにも注意が必要であろう。

## (ケース2) リエ

両親と弟の4人家族。自営業でそれほど経済的な余裕があるわけではない。進学費用に関して母親は、多少の無理をすれば出せないこともないが、大学に行ってもどうしてもやりたい勉強があるのでなければ就職したほうがいいと一貫して言っている。評定値は3.0。「高校入ったときはいっぱい資格をとろうと思って、商業の。でも全然とれなくて。すごい遅刻が多いので、就職できないなって思ったんですよ、2年生の終わり頃。で、B(教諭)が(「おまえも進学にするか?」)と言ってたから、あー、そうか、進学かって。」「やっ

てみようかなって、3年の初めくらいに進路の相談を担当の先生として…」就職は無理だからという理由で進学を希望した。3年の5月から塾に通い始めたが、「うちの学校は進学校じゃないし、勉強とか全然…」やり方が分からず、B教諭の勧めで本活動に参加した。

活動開始時、進学という方向性は決まっていたものの、なかなか自分から動くことができず、志望校について「自分のことなんだから自分で探しなよ」というボランティアの言葉に対して「そう思うけど、何していいか分からないから何か指示して」と答えるような状態だった。活動の進行とともに、次第に志望校選択にも受験勉強にも積極的になっていき、大学へ行きたいという気持ちが「どんどん強くなっていった感じ」であったという。例えば雑談のなかでボランティアに対して「卒論って大変なの?」と聞き、「大変。私卒業できないかもしんない」とボランティアが答えると、「何やってるの?」と卒論の内容を詳しく聞いたり、「学部とか専門ってどうやって決めたんですか?」と聞いたりすることもあった。そのような場合、ボランティアはできるだけ具体的に大学の様子を話すように心掛けた。大学のイメージについて「大学ってラクなのかなって初めは思ってたんですけど、話を聞くとけっこうたいへんそうだなって。勉強がんばらなくちゃいけないなって」思ったとも話している。志望理由書を書いているときになかなか筆が進まない様子だったので、ボランティアが「どうして法学部に行きたいの?」と聞くと最初は「分からない」と答えていたが、ボランティアが「〇〇(弁護士が出演している法律のバラエティ番組)を見て?」などと聞くと「あー、それもある。あと、ドラマとか」と法律に関するテレビ番組の話題で盛り上がり、それらのどこを面白いと感じるのかというところから、法学部への志望動機が整理されていったこともあった。ボランティアと話すなかで、少しずつ大学に対するイメージがふくらんでいったようである。同じ目標をもつ友達やボランティアと過ごす時間や空間そのものを楽しんでいる様子もみられ、進路決定後インタビューで本活動に参加してよかったこととして「大学生と仲良くなれたことが楽しかった」とも答えている。

最初は小論文を一人で書けなかったのが、ボランティアが基本的な書き方を丁寧に説明しながら一緒に書いた。ひとこと書くごとにボランティアの目をみて「これでいい?」というような迷いのある雰囲気だったが、次からはボランティアが何も言わなくても自分で黙々と書くようになった。途中で行き詰って投げ出

しそうになったときに、ボランティアがひと言「がんばれ」ということで、また集中して書き上げたこともあった。しかし一方で学習習慣が身についておらず、活動時にはたいへん積極的に取り組み、2時間近く集中して勉強することも多いのだが、宿題にした課題はなかなかやってくるができなかった。「(家では勉強を)やる気が出ない」と言ったり、「ちょっと勉強に身が入らなくなってきちゃって、ずっと英語ばかりやって。受験勉強だから多いわけじゃないですか、やるのが。全然できなくて。」という状態になり、「お母さんが、そんな態度なら(塾を)やめれば」と言ったことで塾をやめたりもしている。家計への配慮も常にあり、「おねえちゃんが大学行くな自分には行かない」という弟の言葉に考え込む様子もみられた。

また、本人は具体的な進学動機を説得的に語れない(特に受験に反対している母親に対して)ことに悩んでいる様子だった。これに対して我々は「大学に入ってからやりたいことを決めてもいい」「大学ではいろいろな人に出会ったり、いろいろなことを学んだりできるから、そのなかから将来自分がやりたいことが見つかるかもしれないよ」ということを自分たちの経験に基づいて話すようにした。

11月、第一志望の駒澤大学を受験中に国士舘大学の願書を出そうとしたが「駒沢がだめなら就職しなさい」と両親に言われ、受験料をもらえなかったために出願できなかった。その後、駒沢が不合格となり、本人は進学か就職かで深く悩む。その際、一昨年度に生徒として本活動に参加した先輩から「私みたいに二部にして、学費半分だし、昼間働けるから、親に負担かけないためにも…。本当に行きたいんだったら、ちょっと考えてみな」と言われ、それまで考えていなかった二部の受験を決心する。父親に「これを最後に受験させてください」と頼み込み、東洋大学二部に合格した。進路決定後のインタビューでは「高校に入ったとき、中学で勉強しとけばよかったって思った」「(大学では、大学を)卒業したときに後悔しないように、勉強しとけばよかったと思わないように、勉強したい」と意欲を語っている。

本ケースの生徒は学業におけるパフォーマンスがそれほど高くなく、学習習慣も身につけていないことから、受験および学業そのものに対して自信がもてず、不安を抱えている。また、「本当にやりたいことがなければ進学する価値がない」とする親に対して、具体的に「これがやりたい」と言えないことや、家計への配慮から就職も考えている。しかし、受験に向けて努力

し、友達や先輩やボランティアと話すなかで、当初はただ漠然と考えていただけだった進学から、はっきりとした進学意欲が芽生えていった。進学の是非について悩み続けるなかで進路意識が形成されていったものと思われる。

### (ケース3) チハル

母、弟、妹、妹の子どもとの5人暮らし。父母はチハルが小学生の頃離婚。母は病気療養中で、妹の子どもが幼いため、長女として家族を支えてきた。成績はクラスで後ろから数番目、欠席や遅刻もクラス1多く、成績判定会議でいつも名前があがる生徒である。「高校さえ出てくれれば」という親の期待に応えようと必死に頑張っており、9月当初には、「(友だちとは)“どうする?”“フリーター”“どうする?”“フリーター”(と話している。)(自分は)化粧のバイトがしくて、美容部員がしたい。」と語っている。

両親の離婚以降、家族のさまざまな問題を一身に担ってきたチハルに対し、母は「(これまでチハルに)いろいろ迷惑かけちゃったから、個人の人生があるから…もうこれ以上は迷惑はかけないし、お母さんの意見とかも別にそんな聞かなくてもいいから自分の好きなように生きて」と言っており、卒業後の進路について具体的な指針を示してくれる存在は身近にはいない。チハル自身は家族のことをとても大切に思っており、自己の将来について語る時には必ず母が引き合いに出される。それは多くは、「(母の)借金を返して母親を喜ばせたいから、キャバクラで働く」という周囲の友人からの情報をもとにした安易な方向に流されたものである。だが、一方では、「母親の面倒はずっと見ていきたい」、「母がまた悪くなった時に役に立ちたい」、「母親の気持ちが分かるようになりたい」から心理カウンセラーになりたい、という希望を高2の頃から語っていた。その頃からB教諭に「看護婦からの道もあるから」と説得され、興味は感じていたが、金銭的な負担、学業面での努力不足、学校での達成度の低さ、といった諸々の要因から、「わたしには無理だから」と無視しつつ、高3の二学期に至る。本プロジェクトへの参加も、B教諭に「勝手に進路を決められて」「行けて(言われて)、(ボランティアの大学生との)連絡をとる係りになって」であり、主体的な選択というよりも、むしろ関係性への強引な包絡の結果であった。

9月下旬、B教諭に「ボランティアの大学生に看護学校を見学と一緒に行ってもらえるようお願いしなさい」と勧められ、ボランティアの一人と一緒に看護

学校への見学に行くことになる。スカートの長さや髪の色、制服のリボンを忘れたことなどを気にしていたが、ボランティアが「大丈夫だよ」と言うと、自分から募集要項をもらいに来たことを伝え見学の許可を得る。中に入ってから、見学に来ていた別の高校生とすれ違うとすぐさま話しかけたり、学生たちにいろいろ質問したりして興味深げに実習の様子を見学していたが、学生たちがきびきびと動いている様子に対しては、「あんなことできるのかなあ?」、「(理科の授業の)カイコの解剖も途中で投げ出したのに(看護の実習なんて)わたしには無理。」と不安や自信なさを口にした。そんなチハルに対して、ボランティアは、「大丈夫だよ」「チハルさんはおもしろいし、人とすぐ打ち解けられるし、かわいいし、看護婦に向いていると思うよ」「キャバクラも看護婦も人と接して喜んでもらう職業だから、(チハルなら)できるよ」と不安を和らげるよう、看護婦に対して興味が持続するよう話かけた。

また、中学校レベルからの数学の復習や小論文など課題を設定されれば、その場その場では積極的に取り組むものの、「テスト勉強自体したことないから、どうやればいいんだろう?」と不安を口にし、勉強を頑張ったかと思えば二三週間顔を出さないということが繰り返された。その度にボランティアやB教諭がメールで頻繁に連絡を取り続けると、「自分に関わっている人が増えるとその人たちのこと考えようって思うじゃん。」と語っているように、ボランティアとの関係を断ち切ること、受験から完全に降りてしまうことには踏み切れず、また顔を出し、周囲の人に見守られ丁寧に指導してもらえば二時間ほど集中して課題に取り組む姿勢を見せるようになった。

だが、本プロジェクトに参加した生徒たちのほとんどが年内に進路を決めた後、3月の看護学校受験を控えたチハル一人が取り残された形になってからは、学校も欠席しがちになり、ボランティアがメールを送っても返事が来なくなってしまう。ボランティアがチハルからの連絡を待ってまた活動日を設定しようとしていたところ、B教諭からの「(チハルを)三年間見えてきて看護婦を進めているんだから、自分の将来を真剣に考えるように」「興味があるんだったら、それでやる気が出るんだたらいろいろ手伝ってやれるから」という説得があり、看護学校受験を真剣に考えるようになっていった。B教諭によると、チハルは冬休み中ほとんど毎日登校し、B教諭と二人で数学と国語の問題集や作文の練習という課題に取り組んでいたそうである。それでも、自分の時間を全部使って受験勉強に取

り組もうと思った矢先の母親の入院により、「どっちをとるかって言ったら家のことでしょ。やっぱ。」と家族を優先させる。だが、B教諭が「これから山谷あるだろうけど、協力するから頑張りなよ」「自分が頑張る時だから我慢しなよ」とメールで励まし続け、最終的には、受験料の工面が間に合わないなら立て替えることもできるからということを伝え、金銭的な事情で受験を諦めないよう働きかけを行い、3月の看護学校受験にこぎつけた。不合格となったものの4月からは某大病院で看護助手として勤務しており、来春また看護学校を受験する予定である。

「看護婦」という選択肢を提示されて以降、無視を続け、何度も何度も受験から後退する姿勢を見せたという行動面だけを見ると、それを本人の意志による選択であると捉えがちである。しかし、進路決定後、チハル自身が語っているように、「やりたくないわけじゃなくて、興味もあったけど、(授業料を)払いきれない」という経済的負担が一番の障害となっていたのである。B教諭と話す中で、「(先生は)援助とかそういうお金を貸してくれるのとか知っていて、お金はどうにかなるという話になって、それで初めて、じゃあどうしようかなみないな気にな」ることができた。

チハルのように学業成績をはじめとした様々なパフォーマンスが低位にある生徒は、学校からは進路指導の対象外とみなされる。しかし、本プロジェクトにおいて、生徒のペースを大事にしながらも一貫した方向性を提示して受験への支援を続けたことで、自信のなさから生じる不安をいくぶんか和らげ、より安定した進路選択へと導くことが可能となった。生徒のゆらぎを見守りつつも、後退する方向へ揺れた時にこそ支えが必要であることを示唆する事例であるといえよう。

#### (ケース4) アスカ

母、姉との3人暮らし。母は大卒で公務員(保母)をしている。姉はC女子大学3年在学中である。欠席こそ少ないものの遅刻が多く、成績は下位。母は、一貫して大学進学を勧めてきたが、アスカ本人は優秀な姉と比較され続けてきたことから、高校入学時から「高校卒業で、就職するか、結婚するか」と思っており、「学生長くしてもしようがないや」と進学は視野になかった。だが、学年が進むにつれ、結婚も就職も実現可能性が薄れていくのを実感する一方で、親からは「専門(学校)はだめ」と言われ「じゃあなんか大学とか行こうかな」と思い始める。3年になり、仲のよい友



人たちが本プロジェクトに参加し進学を目指すことを決めていく中、「どうしようかなあ?」と決めかねていたところに、B教諭から「お前も大学行け」ととどめの一言をかけられ、「ああ、まあいいか」と本プロジェクトに参加することとなる。

「ここへ来るまでは何も考えてなかった」と言うように、最初は、自己の評価値や受験の日程や手続き、勉強の方法など何一つ知らない状態だった。母親からは保育系の学科に進むことを勧められており、「保育に行きたいというわけじゃなくて、行きたいところがないからそれということで」と、保育を学べる大学をボランティアと一緒に受験情報誌で探すというところから支援が始まった。「何に興味があるかわからない」というアスカに対し、ボランティアは保育以外の方向へも視野を広げさせることを意図し、受験情報誌を一緒に見ながら、「ここはどう?」「経済はどう?」「英文は?」と一つ一つ問いかけていった。すると、アスカは、「数学は嫌い、簿記もダメ」というように、やりたいことを選ぶというより、嫌なものを消去法で消していった。「好きか嫌いか」「勉強したいかどうか」と一つ一つ突きつけられることによって、徐々に自分のやりたいことは何かを意識し考えるようになったと思われる。アスカ自身、「(進学すると決めてから)勉強しなきゃしなきゃと思いつつもりはなくて、しなきゃって思ってあせってどうしようどうしよう思っているだけでしたね」と語っているように、ボランティアとの相互作用の中でようやく大学進学という俎上に乗ることができたといえよう。

成績があまりよくないため、「推薦は無理」と進路担当の教師に言われ、進学意欲を削がれるということもあったが、AO入試などで受験可能なところを目指そうと決め、アスカは拓殖大学と千葉商科大学に願書を請求することとした。友人を誘って千葉商科大のオープンキャンパスに参加してきてからは、「すごい楽しそうだった」から「行く気満々」になり、B教諭からの「近いからいいぞ」という働きかけもあり千葉商科大を第一志望と決めた。ボランティアと一緒に願書締め切りの日程などを調べたところ、千葉商科大の第一回AO入試の出願締切日が数日後に迫っており、しかもA商の文化祭と重なっていることがわかった。「頑張って書けば間に合うけど、書けるかなあ」という状況になった時に、ボランティアは「(何度も受けた方が)合格する確率も高くなるし、頑張って間に合えるようにしたらいいんじゃない?」と励ましたのだが、アスカが「高校最後の文化祭だから頑張りたい」「(文化祭が)

終わったら絶対やりますから」と言ったため、それ以上強く勧めることはしなかった。しかし、文化祭が終わり、ボランティアが「小論文の過去問題を調べて傾向に沿った小論文対策をしていこう」という働きかけをしたとたん、プロジェクトの場に顔を見せなくなる。二週間ぶりに顔を出した時には、「C女子短大を公募推薦で受験することを決めました」と言う。事情を聞くと姉が通っているC女子短大を家族に勧められたからということだった。ボランティアは、「資料請求のやり方がわからないので誰か暇な人いますか?」と助けを求められ、彼女と一緒にホームページで資料請求を行った。また、アスカが「面接でどんなことを聞かれるかな?」と尋ねるので、一緒にホームページを見ながら、どんなことが勉強できるのかを確かめ、志望理由などを一緒に考えた。その翌週には、家族がすでに願書を取り寄せてくれていて願書作成も手伝ってもらったと、ほぼ完成させた願書を持参していた。だが、一人で作業をするのに不安があるようで、ボランティアに対して「見ていてくださいね」と一つ一つ確認しながら書類を封筒に入れ、郵送しに行った。一週間後に面接を受け合格、仲間の中では一番最初に進路が決定した。

進路決定後のインタビューで明らかになったのだが、アスカは、B教諭から「近いからいいぞ」と千葉商科大を提示される一方で、姉からは「二年間の方がいいかもよ」とC女子短大を勧められ、最初は「え? わかんない。どうなんだろうかなあ?全然わかんないや」と戸惑うばかりであったが、出願締切日が迫るにつれ、「東京のはずれで四年間過ごすのと、都会で二年間過ごすのと(どっちがいいかなあ?)」、「あまり好きじゃない商業科目の勉強を続けるか、中学の時から好きだったけど高校で勉強できなかった美術系か」と二つの選択肢の間で揺らぎ始める。その結果、彼女なりの判断基準から後者を選択することとなった。

自由意志による自己選択を迫られた際、アスカのように「なるようになるかな」と楽観的に捉えているままの場合は、時間が経過していても「どうしよう? どうしよう?」って思っているだけ」の状態から一歩も踏み出せず、フリーターへの道を歩むこととなるのではないだろうか。彼女の場合、家族が願書を取り寄せてくれていたり、家で願書作成を済ませてきたりと、家族の支援も得られてはいたが、大学生ボランティアに対して「みなさんがいなかったら、たぶん願書見て、あ、やめるって終わってしまいましたよ。」「小論文の勉強とかやって、自分じゃ絶対やらないから、こんなこと自

分じゃわかんないし、自分じゃそんなやろうとしないから、よかったなって思いましたね。だから、こういう場所があってよかったなって思いましたね。」と語っているように、サポートの場があり、小さなステップを一つ一つ支援してくれるボランティアの存在があってこそ進学が実現したと考えられる。

#### (ケース5) ミキ

義母、実兄、兄の妻、義妹との5人暮らし。実父は義母と離婚し別居中、実母と実父も離婚しており離れて暮らしている。欠席、遅刻ともに多く、成績も下位であるが、A商で行われているボランティア活動には積極的に参加するなど、学校に対して強い反抗心を有しているわけではない。入学当初から卒業後の進路については全く考えておらず、「高校出たらフリーターでいいや、とりあえず高校だけ出ればいいや」と思っており、B教諭に「大学行け」と言われ、「行く気なかったけど行く気にさせられて」本プロジェクトへの参加を決める。親や兄も「遊ぶよりはいいんじゃない?」と進学を後押しし、願書作成の支援もしてくれている。

9月当初には、「大学進学。史学専攻。日本史と世界史は得意。(テストも)90点くらい。」と語っており、受験校を決定する際にも積極的に情報収集し、志望校として立正大史学科や東洋大史学科などを主体的に選択していく。「(大学に入ってから)発掘、修正、古文書解読などの実習が楽しみ。南米は、メキシコあたりに行って土地を買って発掘したい」と熱心に語る一方で、「私入れなかったらどうしよう」と不安を口にしたがり、志願先のうちの一校の応募に間に合わないことが判明し、やや焦ったりする様子も見られる。

最初のうちは、「まず志望動機から書こう」とボランティアが働きかけても、「志望動機と言ってもそんなに書けない」と筆が進まなかった。そこで、ミキが楽しみに話す吉村作治の話題などに交えながら、志望理由になりそうな部分をボランティアが取り上げ発展させて箇条書きにするというステップを踏み、400字書いてくることを宿題とした。だが、翌週ボランティアが「宿題やってきた?」と聞くと、「あーそうだった」と宿題が出ていたことも忘れていて、書き始めてもすぐに「行き詰った」「書けない」「私反省文の方が得意だ〜。ごめんなさいとか書きそうになっちゃう。」とあまり捗らず、また同じ宿題を出すということもあった。だが、ボランティアがミキの話に興味を持って耳を傾け、ミキが詳しく熱心に語る古代遺跡や土器や仏像の話などをもとに、ボランティアが抽象化したり文章の構成を

アドバイスしたりすることを何度か繰り返すうちに、800字ほどの文章を自力で書き上げることができるようになっていった。

そんな折、家出をしていた義妹が帰って来たことから、B教諭宛てに「家を出たいから二部にしたい」というメールを送ってくる。「歴史が好きだから」という理由で選んだ志望校についても、「おもしろくなさそう、入学前に課題を出されるのが嫌だから、受ける気はない」、「(自宅から遠くて)朝から大学に通いたくない」と言い、ボランティアが「1コマ目から始まる授業はそんなに多くないよ」と言っても、浮かない表情をする。また、祖母が亡くなったこともあり、願書の作成なども滞ったまま志望校の出願期日が過ぎてしまう。それでも、10月中旬までは頻繁に参加し、AO入試がだめだったから一般入試で受けてみようかというやる気も見せ、歴史や英語の勉強にも取り組み始めた。苦手な英語では、すぐ飽きてしまい他の話を始めたり「私英語向いてないから」と言ったりし、あまり捗らないこともあったが、ボランティアが「アメリカ行くんでしょ。そしたら英語いるでしょ。」「(英語より)日本史覚える方がよっぽどすごいよ。」と励ますとまた頑張りと、しばらくするとまたおしゃべりという繰り返して、少しずつ問題集を進めていった。だが、11月に入るとあまり顔を出さなくなり、たまに顔を出してもおしゃべりだけして「バイトがあるから」と帰っていくようになった。ボランティアは、ミキの態度の変化に「入試を今度の日曜に控えており、それへの準備を何一つやってないので、とても心配」と気をもみながらも見守り続けるしかない状態が続いた。

我々は事後報告を受けたのだが、9月頃からディズニーランドでのアルバイトに応募しており、採用され、11月初旬よりアルバイトを始めていた。ディズニーランドでのアルバイトという小さい頃からの夢が図らずも高校在学中に叶ったため、大学進学への意欲が急速に失われたものと思われる。11月中頃以降は、ボランティアに「私、人から自分の将来を干渉されたくないんだ。別に大学出たからって何がすごい!って感じかな?あたしの人生は一度きりだから好きに生きさせて欲しい」というメールを送ったり、(彼氏のKさんに「大学は楽しいんだよ」と言われても)「Kさんが大学入ってやってきたことは、みーんな高校の時、やったし、新しいことないし」、「大学で遊んでるよりも働いてた方がいいかなあ」と語ったりするようになった。結局は、志望していた大学にはどこも出願せず、ディズニーランドでのアルバイトというフリーターの道を選択し

た。

ミキの場合、大学に関する態度（語り）が、「大好きな歴史を学べるのが楽しみ」というものから、「遊ぶところだから行かなくてもいい」というものへ変化している点に注目せねばならないだろう。生徒は、その時点その時点での自己の選択を正当化しよう語りを紡いでおり、「自己選択」に委ねるということは、生徒の自己正当化の方便に与することを意味する。結果的に、我々が提示した大学進学という価値は選択されなかったのであるが、生徒の選択自体が可変性のあるものである限り、ある時点での「希望、自己選択」を固定化したものと捉えるのではなく、変わり得るもの・変え得るものと捉え揺さぶりをかけ、より安定した将来への語りが紡げるように働きかけることが必要なのではないだろうか。

## 5 進路指導としての評価と可能性

### (1) 進路指導としての評価

A商は職業高校であるために進学指導に比べて就職指導が重視されており、例えば就職者座談会は開催されるが進学者座談会は開催されていない。したがって生徒は高校では進学した学生たちの生の声を聞くことはできない。また、AO入試や自己推薦入試など生徒自身が自分をアピールしていく入試の指導についてもノウハウがない上に十分な対応をするゆとりが教員にはない状況であった。

これに対して毎週定期的に放課後、大学生・大学院生が学校に来てくれて、相談に来た生徒に対応してくれるということは進路指導上極めて効果的な活動であったといえる。つまり、教師がおこなう指導は進路を考え相談する意志や気持ちがある程度固まってはじめて始まるのであるが、このプロジェクトでは、「どうしようか？」という段階で教員から「大学生さんが毎週来てるから相談してみよう」という、どうしようかを考えるプロセスを支援するものなのである。

生徒は「先生には大学進学を勧められたんだけど…」と、決めかねている理由を大学生・大学院生に語る。その内容は家庭の経済的なことであったり自分の成績の悪さであったり、大学なんかいっても意味ないといった風評に対する不安であったりするのであるが、大学生・大学院生はそれを長時間も聞いてくれる。場合によっては勉強は少しもしないで、他愛のない話も交えて、先生とは異なる自分たちと同じ目線で話ができるのである。先生は生徒から必要な情報を聞きだす

とすぐに結論を出してアドバイスしようとするが、大学生・大学院生は自分の進路選択をいっしょに考えてくれると生徒は感じる事ができ、様々な気持ちを語っている。

### (2) 学習支援としての効果

B教諭によれば、A商の生徒には中学校までの段階のどこかで、何らかの挫折経験や家族や友人関係の悩み、または遊び仲間との交流などから、学習が手につかなかったり欠席しがちになったりして低学力に陥っている者も少なくない。したがって学習習慣がまったくなく、「勉強する暇があったら、雑誌でも読んでいたほうがまし」などという価値観を所有している。

ところが、本プロジェクトのなかでは宿題の作文はまったくやってこないものの大学生・大学院生が横にいて書かせたり学習させたりすると、数時間集中して取り組むことができることが確認されている。「うちの生徒は15分集中するのが限界」と思われている生徒たちが自分に寄り添ってくれる人がいることによって力を発揮できたと見ることができる。やらされているのではなく頑張ることを身近で期待され、見張られるのではなく見守られて、それに応える努力をする姿がそこにはあるのである。

### (3) 自己の進路展望をもつ

このプロジェクトで教員や大学生・大学院生から生徒に与えられる「大学がいいんじゃないか！」という示唆は、「どうしようか？」という漠然としていて何を考えたらいいかわからない混沌とした状況から、大学は自分にとって必要かどうかの判断を迫られることになる。同時に学科調べや小論文対策も進んでいく。この過程で大学進学という方向性を内面化していくケースと、大学進学ではなく専門学校や就職・フリーターといった進路へということを対比させながら考えるケースとがある。さらに大学進学以外の進路選択をする場合には、大学進学を勧める教員や大学生・大学院生を納得させるだけの理由が求められるのである。

### (4) ゆらぎに注目した指導

本プロジェクトをおこなうにあたって学校は、生徒の個人情報について、大学生・大学院生に対して生徒本人が話すこと以外に学校からは提供しないこととしていた。

しかし、実際には本プロジェクト通じて生徒の情報が継続的に収集された。教員が3年間で数回の進路希

望調査と多い生徒で10数回、少ない生徒で数回の面接で把握する情報よりも、毎週接する大学生・大学院生の方が進路選択にゆらぐ生の声をリアルタイムで把握していた。これには接触回数の差もあるが生徒との関係性の差異も大きいものと思われる。教師は「どうするんだい？」と結論をいつも求めるのに対して、大学生・大学院生の方は「どうしようか？」といっしょに考えプロセスを大事にしているのであった。

学校はどう決めたかの結論を知って個別の進路指導が始まるシステムであり、その段階まではシステム的には担任の個別指導がおこなわれるのであるが、計画的な指導が早期化されるほど担任はそちらに時間を割かれ十分な指導がおこなわれなくなる危惧がある。つまり、1年次からおこなわれる進路説明会といった全体指導とアンケートによる進路希望調査がおこなわれることで、一人一人の生徒のゆらぎが着目されることなく切り捨てられることとなる。

このような状況に対して大学生・大学院生から学校側にフィードバックされる情報は大変重要である。本プロジェクトでは定期的に教師と情報交換がなされ、生徒の発言の真意や問題の解決に向けての方法が検討された。これにより生徒の「ゆらぎ」を学校が把握しながら効果的に進路の自己決定へと指導をおこなうことが可能となった。

しかし、その「ゆらぎ」は多くの場合、単純なものではなく、第1に「ゆらぎ」の振幅と周期には個人差があると同時に、「ゆらぎ」をもたらす要因も経済要因や学力・出欠席などの業績といった家庭や生徒個人に個別化している。第2には生徒が語る「ゆらぎ」はいわば屈折したゆらぎであり。例えば、「大学進学は先生に強制されたからで本当は行きたくない」と語る「ゆらぎ」は行動レベルとは一致しないことがあると確認されている。さらに第3に「ゆらぎ」は自発的には生じにくく、教師の示唆と大学生・大学院生の支援のもとで発生・維持され進路選択という収束へ導かれている。

## 6 高校生の進路選択の特徴とその社会的背景

### (1) 「あきらめ」か「ゆらぎ」か

A商での生徒への進路選択支援を通じて見えてきたのは、このプロジェクトに参加した生徒の多くは、当初は自己の成績の低さや家計の状況から大学進学をあきらめていることである。表3は、5名のケースの報告内容を「本人の意識・言動の変化」「家庭背景と親との関係」「ボランティアやB教諭の関わり」の3項目にわけて表にまとめたものである。これを見ても、彼らはこの学校の中でも成績下位であったり、中学の時には落ちこぼれであり、進路に対して高いアスピレーションを持とうとはしていないことが分かる。

アンケート調査であれば、おそらくこうした生徒の多くは無業者予備軍としてカウントされるに違いない。だが、第5節で指摘したように、プロジェクトを通じて大学に行くことを勧められることで、生徒は大学に進もうか止めようかと「ゆらぎ」を見せ始める。B教諭やボランティアの関わりは、いわば彼女たちにゆさぶりをかけるものだったと言える。本プロジェクトに参加したような生徒の場合、進路意識とは、「あきらめ」か「ゆらぎ」として存在するものと捉えるべきなのであり、どうしようかと気持ちが揺らぐところまで持っていくことがまずは重要なのである。高校卒業時点での進路選択とは、そうした状態にある彼らの中間的な意志決定の産物であると考えた方がいい。生徒が下した結論は、大学進学へと向かう場合もあるし、ミキのようにそれに対抗して別の進路を選択する場合もある。

ここで共通しているのは、そこでは、可塑的な存在としての生徒という側面がクローズアップされることである。進学校の生徒の場合は、大学進学は当然のこととして捉えられているために、ゆらぎや可塑性ということは看過されがちであるが、A商の生徒の場合にはそれらを考慮することが重要であり、それゆえに本プロジェクトのような支援活動の教育的な意義が認められるのである。

表3 各ケースの進路選択課程

氏名	本人の意識・言動の変化		家庭背景と親との関係	ボランティアの関わり (*印: B教諭の関わり)
ヒロミ	成績	中学で落ちこぼれる	祖父母と暮らす	
		高校では成績いい	両親の離婚、父の入院	
	プロジェクト参加 以前の状況	「商業高校に入って就職しよう」		
		「就職か専門学校か」	経済状況が苦しい	
		↓	学費自分で払う	
	参加の経緯	半ば無理矢理、活動に参加させられる	家計をめぐる家族との葛藤	
		↓		
	参加状況	参加率高い	姉から「働いたら」と言われる	「行きたくない」という発話が あっても大学進学を勧める
		言動と行動の不一致		できるだけ具体的に大学の様子 を話す
		言動の揺らぎ: 「行きたい・行 きたくない」		
		↓		「水商売は絶対ダメ」と言う。
		ボランティアに話を熱心に聞く		
		バイトを辞めて受験勉強に専念		
		↓		
	進路	東洋二部		
リエ	プロジェクト参加 以前の状況	「遅刻が多いので就職できない」	両親と同居	
		学力への不安・受験への不安	経済的には、進学費用を無理し て出せないわけではない程度	
		↓	家計への配慮	
	参加の経緯	B教諭に進学を勧められる		
		↓		
	参加状況	なかなか自分で動けない	「姉が大学に行くなら自分 は行かない」という弟	
		志望校が自分で探せない	「駒沢がダメなら就職しなさい」 という両親	
		↓		
		大学に対するイメージが膨らむ		小論文の書き方を教える
		「勉強がんばらなくっちゃ」		投げ出しそうな時に「がんばれ」 と励ます
		家ではやる気がでない		自分の卒論のことを話すなどし て、大学のイメージを膨らませ る
		宿題にした課題をやってこない		身近な話題を出しながら志望動 機と一緒に整理する
		親に受験させてと頼みこむ		
		↓		
	進路	東洋二部合格		
		↓		先輩からの一言「親に負担かけ ないためにも、本当に行きたい んだったら、二部も考えてみた ら」
		塾をやめる		
		↓		
		駒澤不合格: 進学か就職かで悩 む		
		受験に反対する母親に対して、 進学動機を説得的に語れないで 悩む		(進学動機を今語れなくても) 「大学に入ってからやりたいこ とを決めてもいい」という。

氏名	本人の意識・言動の変化		家庭背景と親との関係	ボランティアの関わり (*印: B教諭の関わり)
チハル	成績	低い、努力不足	父母の離婚	
	プロジェクト参加 以前の状況	「化粧のバイトがしくて美容 部員がしたい」	母・弟・妹・妹の子どもとの5 人暮らし、母の病気療養	
		「(母の) 借金を返して喜ばせたい からキャバクラで働きたい」	「親の借金を返したい」	
		「母の気持ちが分かるようになる ために心理カウンセラーになりたい」	経済的負担の不安「授業料払い きれない」	
		↓		
	参加の経緯	「B教諭に勝手に進路を決めら れた」「行けて言われた」		
		↓		
	参加状況	課題には積極的に取り組む		本人と一緒に看護学校を見に行 く。
		「看護婦、私には無理」と不安を 口にする		「看護婦に向いている」と言う。
		2、3週間顔を出さないことも ある		
		「テスト勉強の仕方が分からない」		
		「関わってくれた人のこと考え よう」		
		「親の病気と自分のことなら親 をとる」		*冬休みの学習指導
		↓		
	進路	看護学校受験。看護助手をしな がら、来年再受験をめざす。		*「受験料の立て替えもできる から」と言う
アスカ	成績	下位	母子家庭	
	プロジェクト参加 以前の状況	「高校卒業で、就職か結婚か」	姉: C女子大の学生	
		「学生長くしてもしようがない」	母は進学を勧める	
		自己評定値や受験日程、手続き を知らない	母「専門学校はダメ」	
		↓		
	参加の経緯	仲の良い友達に誘われての参加		
		↓		
	参加状況	なるようになるという考え方		「AO入試や推薦入試をしてい る大学を探してみよう」と受験 情報誌と一緒に見る。
		小論文を自分ではやらない		大学のHPを見ながら、志望理 由などを一緒に考える。
		プロジェクトに参加しなくな る。	家族が願書を取り寄せてくれ る。	*「近いから良いぞ」と千葉商 科大を進める。
		「C女子短大を公募推薦で受験 することに決めました」	姉から「2年間の方がいいかも」 とC短大を勧められる	
		↓		
		「東京の外れで4年間と都会で 2年間過ごすのとどちらがいい か」と迷った上、後者を選択。		
		↓		
	進路	C女子短大		
ミキ	成績	下位	実の父母の離婚、実父と義母の 離婚	
	プロジェクト参加 以前の状況	「高校出たらフリーターでいい や。とりあえず高校だけ出れば いい」	義母、実兄、兄の妻、義妹との 5人暮らし	
		↓		

氏名	本人の意識・言動の変化		家庭背景と親との関係	ボランティアの関わり (*印: B教諭の関わり)
ミキ	参加の経緯	B教諭に「大学行け」と言われる。		
		↓		
	参加状況	「志望動機書けない」		志望理由になりそうな部分をボランティアが取り上げて箇条書きにする
		受験情報積極的に収集		ミキの話にボランティアが興味を持って耳を傾ける
		「大学入ってからの実習楽しみ」		
		↓		
		「入学前に課題を出されるのが嫌だから受ける気ない。」	家出をしていた義妹が戻る	
		「家から遠くて、朝から大学に通いたくない」	「家を出たい」	
		入れない不安		
		受験に積極的な姿勢と後退的な動き		
		11月に入ると出席しなくなる。		
		↓		
		ディズニーランドのバイト		
		↓		
		「大学出たから何がすごいのか」		
		「人生一度きりだから好きにさせて欲しい」		
		「Kさんが大学入ってやってきたことは、みんな高校の時やった。」		
		↓		
	進路	ディズニーランドのバイト (フリーター)		

## (2) 進路選択を規定する要因

生徒たちの進路選択を規定する直接の要因は、しばしば本人自身の成績の低さであったり、学習習慣が身についていないことであったりする。それが基となって本人たちは自信を持てず、大学進学に対して不安を募らせることとなる。

また、そうした個人的要因とは別に、本プロジェクトを通じてきわめて鮮明に浮かび上がったのは、家族との関係や家計の状況である。表3の「家庭背景と親との関係」の項をみると、どの生徒も複雑な家庭背景を抱えていることが分かる。そしてしばしば、親やきょうだいとの関わりが、生徒たちの進路の語りに登場する。

家計の問題も、単純に「お金がないから大学をあきらめる」といった言い方ではなく、「親に迷惑をかけたくない」、「親の借金を返したい」といった親への気遣いという語りとして登場する。しかもその場合は、往々にして、生徒は自発的な意志として大学に行かないことを語るのである。

このように家族のことは、彼らの進路の語りにしばしば登場するのであるが、それは単純に家族という変数が彼らの進路を規定していると捉えるよりも、自ら

の進路の問題を家族の問題として語らせる、あるいは家族の問題としてしか語らせない権力作用が働いていることを同時に理解すべきだろう。

たとえば、彼らが親に迷惑をかけたくないとして家計の状況を進路選択の語りに持ち出すのは、実は、国家のサポートがきわめて弱いという日本の政治状況に規定されていることでもある。ジル・ジョーンズらの『若者はなぜ大人になれないのか』(1996)を訳した宮本が、同書の解説の中で、イギリスと対比しながら指摘しているように、「わが国の場合若者の自立を達成するための援助はもっぱら親に負わされており、国家の果たす役割は欧米先進諸国のレベルからみると著しく低い」のである。

生徒は進路選択を家族との関わりの中で語ったり、あるいは自己の成績の悪さなどの問題として語ったりする。いわば「個人的な失敗」や「身内の問題」としてのみ語るものであり、大学に行くための奨学金制度の不整備の問題を批判することもない。

なお、彼らの家族の語りには、その家族が帰属するとされる階級の文化的要素が語られることも少ない。もちろん、大学に行くことを親が進めないという意味ではその種の文化的要素が見られるということもでき

る。だが、ウィリスが描いた「野郎ども」のような、労働者階級としての「われわれ意識」に裏打ちされた中産階級への対抗的な語りは、本プロジェクトのいずれのケースからも聞かれなかったのである。ここにはまさに、ベックが述べたような、社会的不平等や社会的危険の個人化を反映した状況が生じていると言える。

プロジェクトを通じて、もう1つ浮かび上がったのは、大学などの進路に関して生徒が有している情報量の少なさという問題である。情報に関しては、下村(2002)が荻谷(1991)をもとに、「高校生は自分がどのような進路に進むことができるかを自分の成績や欠席日数などからかなり正確に予測できる」と述べている。だが、それらの情報はあっても、例えば大学進学に関して彼らが有する情報は極めて限られている。受験情報誌などで学科構成や試験の種類などの大まかな情報は彼らでも入手が可能である。しかし、具体的な大学での勉強の内容や学生生活の様子は分からない。数多ある大学から志望校や志望学科を選び出すのは、本プロジェクトが対象にしたような生徒には至難の業である。親が大卒でない場合、生徒たちは「大学＝レジャーランド」というマスコミが提供してきたイメージだけを有している。それゆえ、ミキが言ったような「大学でやるようなことは高校でやった」という言い方となるのである。

このため本プロジェクトでは、大学とはどういうところか、どのような学科があり何が学べるのか、入試にはどんな種類があり、どのような準備が必要かといった情報を生徒と一緒に収集する作業にかなりの時間を費やした。情報を得ることで、生徒は新たな進路希望を見だし、それにむけてはっきり動機づけられていくケースも見られた。

以上の報告を通じて、我々は、A商業高校という学校に通う生徒たちを例に、無業者になる可能性の高い生徒たちの進路意識や進路選択過程やその背景要因を理解することを試みた。今後の課題としては、第一に男子生徒を対象とした調査が必要である。本プロジェクトでも、男子生徒に係わった事例はないわけではないが、量的に少ないこともあって、今回は取り上げていない。しかし、男子を対象にすることで、実践的な課題においても分析的な課題においてもさらに検討すべき課題がいくつも見いだせるだろう。

第二は、ここでの生徒たちへの関わり方が、彼らの卒業後の生活や進路に対してどのような影響を及ぼすのかを解明することである。教師側の明確なメッセー

ジを受け取り、そこで悩みながら彼らはある進路を選択した。しかし、それはあくまで中間段階での選択である。その後も、ここで受けたメッセージやそこでボランティアやB教諭との関わりの中で考えたことは繰り返し想起され、彼らの語りの中に取り込まれるだろう。それがどのようなものかを確認する作業が残されている。

(1・2・6 酒井、3・5 千葉、4・ケース1・2 濱野、ケース3・4・5 広崎)

## 引用文献

- ベック、U., 1998『危険社会：新しい近代への道』法政大学出版局。
- Cochran, L., 1997 Career counseling : a narrative approach, Thousand Oaks : Sage Publications.
- ギデンズ、A., 1993『近代とはいかなる時代か？—モダニティの帰結』、而立書房。
- ジョーンズ、G., ウォーレス、C. 1996『若者はなぜ大人になれないのか』新評論、宮本みち子監訳、徳本登訳。
- 荻谷剛彦 1991『学校・職業・選抜の社会学』東京大学出版会。
- 荻谷剛彦、濱中義隆、大島真夫、林 未央、千葉勝吾 2003 「大都市高校生の進路意識と行動—普通科・進路多様校での生徒調査をもとに—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第24巻、33-63頁。
- 耳塚寛明 2000『高卒無業者の教育社会学的研究』（平成11年度～平成12年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究報告書）。
- 下村英雄 2002「フリーターの職業意識とその形成過程—「やりたいこと」志向の虚実」、小杉礼子編『自由の代償／フリーター—現代若者の就業意識と行動—』日本労働研究機構、75-100頁。
- ウィリス、P., 1985『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗・労働への順応』筑摩書房。